

## 巻 頭 言

例年に比べ梅雨明けが遅れた今年の夏は、容赦なく照り付ける灼熱の太陽と猛暑に彩られた。土用を過ぎてからの本格的な暑さはまた格別、炎威日ごとに増し、遠景の揺らめきは陽炎のせい自らの眩惑の由か、わからぬ程であった。日中、わずかばかりの打ち水に涼を追ってはみるものの、夕刻になっても熱気は地を覆い、暑気を払うはずの風は風鈴を鳴らす力もない。縁側に腰掛けての夕涼みは今や昔日の夢、玲瓏の水のせせらぎを求めて川縁を歩き、「これぞせめてもの遊涼み」と洒落込んでみた。

散策の途中、庭の時計草に目が止まった。花盛りは七月だったかと思ったが、これも夏の訪れが遅れたせいなのだろう、なかなか見事に咲いていた。この花は、その名の通り時計そっくりだ。花冠と副冠を時計の文字盤、雌しべと雄しべを長針と短針、秒針と見立てて名づけられたこの名前は、日本流想像力の傑作であろう。

しかし、西洋の想像力はこの花をパッションフラワー、キリスト受難の花と見立てた。古城ハドンホルのタペストリーにヒントを得た英国製の有名な白磁に、パンジーなどと並んで時計草が図案的に描かれているのはよく知られていよう。西洋でも有名なその花を英語でパッションフラワーと呼ぶと聞いたのは大学生の時であった。神父から名前の由来を教わった時、「見る」という行為がいかに理論負荷的であるか、どれほど文化に規定されるか、はたまた人間の想像力とはどれだけ豊かなのか等々、驚きと感心が入り混じった心境になったことを思い出す。

この花をパッションフラワーと名づけたのはイエズス会宣教師達だった。16世紀末、南米に渡り、夏の陽に咲くこの珍奇な花を目にした彼らは、子房柱を十字架、三本の花柱を釘、副冠を茨の冠、五つの葯を傷痕、雄しべを金錠、巻きひげを鞭、裂けた葉を槍、ガクを放射状に広がる円光（後光）、五枚の花弁と五枚のガク片を合わせてペテロとユダを除く十人の使徒、花の白い部分を純潔、青い部分を天国に、それぞれ見立てた。彼らはこの花こそアッシジの聖フランチェスコが夢に見た十字架上の花だと紛うことなく信じ、磔刑されたイエスの受難を示す花としてキリスト教の布教に利用したのだという。

時計草は、幾日かの誕生花に選ばれているが、六月十三日という、キリスト教徒に意味あり気な日の花にも選ばれている。花言葉は「聖なる愛」。たとえ同じ花を見ても、ヨーロッパの人達がこの花に感じる文化的な意味は、私たちのものとは大きく異なるだろう。

そういえば、南方熊楠も随筆の中で時計草について語っていた。自宅の庭に植えたところ、予想以上に蔓延ってしまってこの上なく往生したという話だったと記憶している。博覧強記の傑物と時計草、彼の味わった苦難、これはまた東洋の一種の貴種流離譚か？ 徒然に思いを巡らし、夢想仙郷に遊ぶうち、辺りにこもった現の暑熱に汗が噴き出し、我に返った。

「智目行足を以って清涼池に到る」と言う。清涼池とは即ち涅槃（さと）を指す。暑さに参っているようでは、清涼池に辿り着くことなど夢のまた夢だろう。少年老い易く、学成り難し。峻険なる学究の道はどこまでも長く、覚悟の歩みはいつまでも続く。今回、十月号に列せられた諸賢の論は、真摯な学徒にとって、遥かなる清涼池への一里塚となるものだ。心して拝読し、勉強させていただきたい。

（ぐずぐずと梅雨が長引く間に列島各地では集中豪雨や大地震にみまわれた。甚大な被害を受けた方々には心からお見舞い申し上げ、義捐をお届けすると共に、一日も早い復興をお祈り申し上げたい。）

（井原奉明）